

資料紹介

同志社大学文化情報学部所蔵品「源氏物語貝合せ」の紹介

福田 智子

同志社大学文化情報学部が所蔵する貝合わせの具(同志社大学学術情報検索システムDOORSでは「源氏物語貝合せ」として登録されている)は、『源氏物語』の場面を八対、十六個の貝に描いた工芸品である。本稿は、それら八つの絵について、他の源氏絵と比較検討することにより、『源氏物語』の巻や場面を特定し、源氏絵の系譜に位置づけるものである。

同志社大学文化情報学部所蔵品「源氏物語貝合せ」(請求番号…798[G9216、資料番号186700023])は、『源氏物語』の場面を八対、十六

わゆる源氏絵の系譜の中に、どのように位置づけられる図柄であるのか、検証するものである。

凡例

貝と右貝に描かれた同じ絵を手掛かりに、貝の対を選び合わせる遊戯に用いる。貝の大きさは、縦七・二～八・四センチ、横九・一～九・八センチ。箱(縦三一・七センチ、横二三・六センチ、高さ六・八センチ)に入っているが、もちろん元来のものではない。製作された当初は、おそらく全五十四帖、五十四対揃いであったものと推察される。製作年代は未詳という他ないが、近代まで下るものではないだろう。少なくとも江戸後期といったところか。

一、冒頭に、同志社大学文化情報学部所蔵品「源氏物語貝合せ」(所蔵する学部名「文化情報」にちなみ、略称を「文情貝合」とする。)の画像を示し、『源氏物語』五十四帖のうちの帖の通し番号と巻名を示す。なお、これらの画像は、同志社大学デジタルコレクションに公開されている。

本稿は、所蔵される八対の貝に描かれる絵について、『源氏物語』のどの巻、どの場面を描いたものなのかを考察し、さらに、その絵が、い

一、【場面】では、『豪華「源氏絵」の世界 源氏物語』(秋山虔・田口榮一監修、株式会社学習研究社、一九九七年四月。略称『源氏絵の世

界』)。所載「源氏絵帖別場面一覧」(二九〇〜三〇一頁)を参看し、該当する「場面」の記号(アルファベット)と「場面内容概略」を挙げる。ただし、「場面内容概略」は、具合せの場面を過不足なく示すものではない。

一、【該当本文】では、角川古典大観『源氏物語』CD-ROMに拠り、巻を特定するために、該当する『源氏物語』本文を、小見出しとともに引用し、次の【解説】の着眼点となる部分には傍線を付す。また、()を付して、主語を補ったり、人物呼称を加えたりした箇所もある。さらに、同CD-ROMの「参考情報」機能を用いて、以下の校本および校訂本文の該当巻数と頁数を列挙する。

- ・『源氏物語大成』(中央公論社) 略称【大成】
- ・日本古典文学大系『源氏物語』(岩波書店) 略称【大系】
- ・新日本古典文学大系『源氏物語』(岩波書店) 略称【新大系】
- ・日本古典文学全集『源氏物語』(小学館) 略称【全集】
- ・新編日本古典文学全集『源氏物語』(小学館) 略称【新全集】
- ・新潮日本古典集成『源氏物語』(新潮社) 略称【集成】
- ・角川文庫『源氏物語』(角川書店) 略称【文庫】
- ・玉上琢彌『源氏物語評釈』(角川書店) 略称【評釈】

一、【解説】では、「文情具合」の図柄について具体的に説明する。物語本文を引用する際には、前掲の角川古典大観『源氏物語』CD-ROMに拠る。

一、【考察】では、他の源氏絵と図柄を比較検討する。まず、『源氏絵の世界』掲載図版を参看し、図版番号もこれに拠る。その他の文献は次の通り。

・『源氏物語画帖』(京都国立博物館所蔵、土佐光吉画、後陽成天皇他書、勉誠社、平成九年四月。略称【京博本】)。

・『石山寺蔵 四百画面 源氏物語画帖』(石山寺座主・鷺尾遍隆監修、中野幸一編集、勉誠出版、二〇〇五年四月。略称【石山寺画帖】)。

・承応三年(一六五四)版『源氏物語』(略称【承応版】)。

一、【まとめ】では、最後に全体を通して総括する。

第一帖 桐壺



【場面】 D…清涼殿東廂にて源氏元服の儀式。左大臣加冠の役を務める。

【該当本文】

〔25〕源氏十二歳で元服、帝そのすばらしさに感嘆する

おはします殿の東の廂、東向きに椅子立てて、冠者の御座、引き入れの大臣の御座、御前にあり。申の時にて源氏参りたまふ。角髪結びたまへるつらつき、顔の匂ひ、さま変へたまはむこと惜しげなり。大藏卿、藏人つかうまつる。いときよらなる御髪をそぐほど、心苦しげなるを、上は、御息所の見ましかばとおぼしいづるに、たへがたきを、心強く念じかへさせたまふ。

〔大成〕 1巻24頁、〔大系〕 1巻48頁、〔新大系〕 1巻24頁、〔全集〕 1

巻121頁、〔新全集〕 1巻45頁、〔集成〕 1巻36頁、〔角川文庫〕 1巻45頁、

〔玉上評釈〕 1巻135頁

【解説】

源氏の元服の場面である。源氏の父、桐壺帝は、画面中央の奥まった座の椅子に腰を掛ける。胸から下の姿であり、帝を描くときにはよくあるように、顔は描かれない。「冠者」（元服し冠を付ける者）である源氏は、画面向かって左側に描かれ、目の前には冠と笄が置かれている。「引き入れの大臣」（加冠役の大臣）はその右側で、左大臣が務めた。黒の衣冠束帯姿は「大藏卿」、朱の直衣は「藏人」か。理髪の役を務めたものであろう。

【考察】

桐壺巻を代表する場面のひとつである。『源氏物語扇面散屏風』（室町時代後期、浄土寺蔵）4（『源氏絵の世界』31頁）の他、『石山寺画帖』桐壺六（六図）にも見え、付箋には、「同六 源氏けんふくの所也 み

つらゆひ給へるつらつきさまかへたまはん事いとをしげ也と云所也」とある。だが、桐壺帝・源氏・左大臣・大藏卿の配置や、冠と笄を描くといった点では、「承応版」桐壺卷第五図に酷似する。

第十三帖 明石



【場面】C…八月十三夜、源氏、馬に乗り、入江沿いに明石の君のもとに向かう。

【該当本文】

〔17〕八月十三日の夜、入道の誘いにより、源氏は岡辺の女の宿を訪れる。忍びてよろしき日みて、母君のとかく思ひわづらふを聞き入れず、弟子どもなどにだに知らせず、心一つに立ちゐ、かかやくばかりしつらひて、十三日の月のはなやかにさしいでたるに、ただ「あたら夜の」と聞こえたり。君は好きのさまやおぼせど、御直衣たてまつりひきつくるひて、夜ふかしていでたまふ。御車は二なく作りたれど、ところせしとて御馬にていでたまふ。惟光などばかりをさぶらはせたまふ。(……中略……)

造れるさま木深く、いたきところまさりて見どころある住まひなり。海のつらはいかめしうおもしろく、これは心細く住みたるさま、ここにゐて思ひのこすことはあらじとおぼしやらるるに、ものあはれなり。三昧堂近くて、鐘の聲、松風に響きあひてもの悲しう、岩に生ひたる松の根ざしも心ばへあるさまなり。前裁どもに虫の声をつくしたり。ここかしこのありさまなど御覧ず。むすめ住ませたるかたは、心ことにみがきて、月入れたる真木の戸口けしきばかりおし開けたり。

〔大成〕2巻463頁、〔大系〕2巻81頁、〔新大系〕2巻75頁、〔全集〕2巻244頁、〔新全集〕2巻255頁、〔集成〕2巻288頁、〔角川文庫〕3巻87頁、〔玉上評釈〕3巻215頁

【解説】

源氏が馬に乗り、惟光など数名の従者を連れて明石入道の邸に赴いた場面と見られる。八月十三夜といえ月を描かれないが、「前裁どもに

虫の声をつくしたり」ともあり、画面中央奥の紅葉が、その季節感を表している。

画面左側に明石入道の邸内が吹抜屋台の技法で描かれる。手前の部屋で襖を背にして座るのは源氏であろう。その前にいる尼削ぎの女性は、明石入道の妻、尼君であろう。とすれば、その隣りの男性は、明石の入道か。ただし、いわゆる入道姿ではない。明石の君は、奥の別室におり、實の子には女房が控えている。

【考察】

「文情貝合せ」の構図と同様の絵は、未だ管見に入らないが、遊具に描かれる絵としては、ある程度定着した型に則ったものであったと考えられる。後考を俟つ。



【場面】 D・秋、源氏供人を整え、住吉詣。源氏の栄華を目のあたりにした明石の君の住吉詣の舟はそのまま住吉の浜を去る。

【該当本文】

「18」源氏は願果たしに住吉詣で、参詣に訪れた明石の君は、その盛儀をまのあたりにする

その秋、住吉にまうでたまふ。願ども果たしたまふべければ、いかめしき御ありきにて、世の中ゆすりて、上達部、殿上人、われもわれもとつかうまつりたまふ。

をりしもかの明石の人、年ごとの例のことにてまうづるを、去年、今年はさはることありて、怠りけるかしこまりとりかさねて思ひたちけり。船にてまうでたり。岸にさし着くるほど見れば、ののしりてまうでたまふ人のけはひ渚に満ちて、いつくしき神宝を持て続けたり。楽人十列など装束を調べ容貌を選びたり。「誰がまうでたまへるぞ」と問ふれば、「内の大臣殿の御願はたしにまうでたまふを、知らぬ人もありけり」とて、はかなきほどの下衆だにここちよげにうち笑ふ。げに、あさましう、月日もこそあれ、なかなか、この御ありさまをはるかに見るも、身のほど口惜しうおぼゆ。さすがにかけはなれたてまつらぬ宿世ながら、かく口惜しききはの者だに、もの思ひなげにてつかうまつるを色節に思ひたるに、なにの罪深き身にて、心にかけておぼつかう思ひきこえつつ、かかりける御びきをも知らでたちいでつらむなど思ひ続けるに、いと悲しうて、人知れずしほたれけり。

「大成」2巻499頁、「大系」2巻118頁、「新大系」2巻112頁、「全集」2巻292頁、「新全集」2巻302頁、「集成」3巻32頁、「角川文庫」3巻119頁、「玉上評釈」3巻312頁

〔19〕源氏一行のはなやかな様子に、明石の君はわが身のほどを知る

御車をはるかに見やれば、なかなか心やましくて、恋しき御影をもえ見たてまつらず。河原の大臣の御例をまねびて、童隨身をたまはりたまひける。いとをかしげに装束き、角髪結ひて、紫裾濃のもとゆひなまめかしう、丈姿調ひ、うつくしげにて十人、さまことにいまめかしう見ゆ。

〔大成〕2巻500頁、〔大系〕2巻119頁、〔新大系〕2巻114頁、〔全集〕2

巻294頁、〔新全集〕2巻304頁、〔集成〕3巻34頁、〔角川文庫〕3巻121頁、

〔玉上評釈〕3巻320頁

【解説】

源氏が願果たしに住吉詣でをする場面である。多くの松が描かれるのも、そこが住吉であることを象徴的に示すものである。黒い袍の束帯姿で、下襲の裾を長く引き、画面左側の鳥居をくぐろうとしている源氏に、多くの上達部・殿上人が付き従う。鳥居の傍ら、列の前方にいる背の低い二人の人物は、童隨身と見られる。画面右下方には、源氏が乗って来たであろう車の屋根が見える。また、左下方の馬の描写も、小さい絵ながら躍動感がある。

一方、画面右奥の小舟には、二人の女性が乗っている。左側の朱の衣の女性は明石の君、右側はその女房であろう。源氏の盛儀とは対照的に、画面の片隅にひっそりと描かれている。

【考察】

源氏の豪華な住吉詣でのさまと小舟に乗る明石の君とを描く構図は、〔京博本〕59（『源氏絵の世界』78頁）、〔石山寺画帖〕滯標五（一一四図）の他、「承応版」滯標卷第三図にも見られるところである。中でも〔京

博本〕の源氏の姿は、黒い袍の束帯姿で、下襲の裾を長くという点で、「文情貝合せ」と一致する。ただし、「京博本」では、源氏は鳥居をくぐった後、「文情貝合せ」はそのままに鳥居をくぐろうとしている場面である。また、「石山寺画帖」の付箋に「同五 すみよしもうての所にてかはら大臣のれいになすらへてわらはすいじんと云所也」と記されるように、童隨身は本場面を印象づける存在だったようである。〔京博本〕にも、源氏一行の先頭に童隨身が描かれている。



【場面】C…源氏、明るい朝の光の中で玉鬘を引き寄せ戯れる。夕霧はこれを見て驚く。

【該当本文】

「10」源氏が玉鬘のもとを訪れ、たわぶれかかる姿を夕霧はかいま見してあやしく思う

(源氏)「ことごとしく前駆な追ひそ」とのたまへば、ことに音せで入りたまふ。屏風などもみなたたみ寄せ、ものしどけなくしなしたるに、日のはなやかにさしいでたるほど、けざけざともなきよげなるさましてゐたまへり。近くゐたまひて、例の、風につけても同じ筋にむつかしう聞こえたはぶれたまへば、たへずうたてと思ひて、「かう心憂ければこそ、今宵の風にもあくがれなまほしくはべりつれ」と、むつかりたまへば、いとよくうち笑ひたまひて、「風につきてあくがれたまはむや、かるがるしからむ。さりともとまるかたありなむかし。やうやうかかる御心むけこそそひにけれ。ことわりや」とのたまへば、げに、うち思ひのままに聞こえてけるかな、とおぼして、みづからもうち笑みたまへる、いとをかしき色あひ、つらつきなり。酸漿など言ふめるやうにふくらかにて、髪のかかれるひまひまうつくしうおぼゆ。まみのあまりわららかなるぞ、いとしも品高く見えざりける。そのほかは、つゆ難つくべうもあらず。

中将(夕霧)、いとこまやかに聞こえたまふを、いかでこの御容貌見てしかなと思ひわたる心にて、隅の間の御簾の、几帳は添ひながらしどけなきを、やをらひきあげて見るに、まぎるるものどもとりやりたれば、いとよく見ゆ。かくたはぶれたまふけしきのしるきを、あやしのわざや、親子と聞こえながら、かくふところ離れず、もの近かべきほどか

は、と目とまりぬ。見やつけたまはむ、と恐ろしけれど、あやしきにも驚きて、なほ見れば、柱隠れに少しそばみたまへりつるを、ひき寄せたまへるに、御髪のみ寄りて、はらはらとこぼれかかりたるほど、女もいとむつかしく苦しと思うたまへるけしきながら、さすがにいとごやかなるさまして、寄りかかりたまへるは、ことなれなれしきにこそあめれ。いであなうたて、いかなることにかあらむ。思ひよらぬ隈なくおはしける御心にて、もとより見なれ生ほしたてたまはぬは、かかる御思ひそひたまへるなめり、むべなりけりや、あなうとまし、と思ふ心も恥づかし。

〔大成〕 3巻873頁、〔大系〕 3巻57頁、〔新大系〕 3巻46頁、〔全集〕 3巻269頁、〔新全集〕 3巻277頁、〔集成〕 4巻136頁、〔角川文庫〕 5巻71頁、〔玉上評釈〕 5巻473頁

【解説】

源氏が養女である玉鬘に戯れかかる様子を、夕霧（中将）が目撃し、衝撃を受ける場面である。吹抜屋台の技法で描かれる。室内には源氏と玉鬘が描かれるが、戯れかかる源氏と、気強く拒絶するでもない玉鬘の様子が、小さな画面ながら動きをもつて描かれている。部屋の外から垣間見る夕霧の当惑する表情も窺える。

【考察】

室内の源氏と玉鬘、垣間見る夕霧という構図は、『土佐光起筆源氏物語画帖』（江戸時初期、個人蔵）108（『源氏絵の世界』141頁）に見える。「光則が徳川美術館本画帖に同様の場面を描いており、それに基づきながら、光起が室内調度や前栽の景を若干省略したものと考えられる。」（『同』同頁）と指摘されており、野分巻を代表する場面のひとつである。

「石山寺画帖」野分六（一九〇図）にも、「同六 源玉へ行給ひ玉を引よせ給ふを夕きり木丁のかけよりのそき給ふ所也」という付箋の記述とともに、同じ図柄が認められる。



【場面】A…内大臣、藤花の宴に夕霧を招き、杯に藤の花房を添えて、雲居雁を許す歌を詠む。柏木ら同席する。

【該当本文】

「3」内大臣は藤の花の宴を催すことにし、柏木を使いとして夕霧を自邸に招く

ここの年ごろの思ひのしるしにや、かの大臣（内大臣）も、なごりなくおほし弱りて、はかなきついで、わざとはなく、さすがにつぎづきしからむをおぼすに、卯月のついたちごろ、御前の藤の花、いとおもしろう咲き乱れて、世の常の色ならず、ただに見過ぐさむことをしき盛りなるに、遊びなどしたまひて、暮れゆくほどのいとど色まされるに、頭の中将（柏木）して御消息あり。「ひとひの花の陰の対面の、飽かずおぼえはべりしを、御いとまあらばたち寄りたまひなむや」とあり。御文には、

わが宿の藤の色濃きたそかれに尋ねやは来ぬ春のなごりを
げにいとおもしろき枝につけたまへり。

〔大成〕3巻99頁、〔大系〕3巻185頁、〔新大成〕3巻178頁、〔全集〕3巻426頁、〔新全集〕3巻434頁、〔集成〕4巻282頁、〔角川文庫〕5巻173頁、〔玉上評釈〕6巻406頁

《参考》「6」内大臣は夕霧に酒を勧め、雲居の雁とのことで恨みごとを述べ、結婚するよう求める

（内大臣ハ）御時よくさうどきて、「藤の裏葉の」とうち誦じたまへる、御けしきをたまはりて、頭の中将（柏木）、花の色濃くことに房長きを折りて、客人（夕霧）の御盃に加ふ。取りてもて悩むに、大臣、

紫にかことはかけむ藤の花まつよりすぎてうれたけれども

宰相、盃を持ちながら、けしきばかり拝したてまつりたまへるさま、いとよしあり。

いくかへり露けき春を過ぐし来て花のひもとくをりにあふらむ頭の中將にたまへば、

たをやめの袖にまがへる藤の花見る人からや色もまさらむ

次々順流るめれど、酔ひのまぎれにはかばかしからで、これよりまさらず。

〔大成〕 3巻1002頁、〔大系〕 3巻189頁、〔新大成〕 3巻181頁、〔全集〕 3巻430頁、〔新全集〕 3巻438頁、〔集成〕 4巻286頁、〔角川文庫〕 5巻176頁、〔玉上評釈〕 6巻416頁

【解説】

夕霧が、内大臣主催の藤花の宴に招かれ、内大臣・柏木とともに宴席を囲んでいる場面である。吹抜屋台の技法を用いて描く。庭の遣り水のほとりには、藤の花が咲き乱れる。邸内には三人の男性貴族が座す。屏風を背にしているのは内大臣であろう。顔を画面左側に向けている中央の人物、およびその視線の先の人物は、それぞれ夕霧か柏木であろうが、両者の区別はつきにくい。中央の人物は左手を、画面左側の人物は右手を胸元まで挙げ、互いに向かい会話をしているようにも見える。各人の前には足つき折敷が据えられ、その上に載っているのは魚であろうか。同様の折敷は、部屋の中央にももう一つある。

【考察】

「文情貝合せ」に類する図柄は、『伝土佐光則筆源氏物語画帖』（江戸時代初期、根津美術館蔵、略称「根津美術館画帖」）33（『源氏絵の世界』152・153頁）に見える。五人の男性貴族が室内に座しているが、奥の三人

の前にはそれぞれ折敷が据えられている。屏風の前に座するのは内大臣。また、中央の人物は、「文情貝合せ」の中央の人物と同様に、顔を画面左の人物に向けているが、藤の花房を手をしている。柏木であろう。室内で藤の花房を持つ人物が柏木であることは、『該当本文』《参考》傍線部の内容に照らして明白である。そうすると、その左側が夕霧ということになる。一方、肝心の「文情貝合せ」では、いずれの人物も藤の花房を手にしていない。転写の過程の写し崩れであろうか。これにより両者の区別が曖昧になっているが、当巻の藤花の宴の様子を描写したものであることは判断できよう。

〔石山寺画帖〕藤裏葉二（二一八図）にも「根津美術館画帖」と同じ場面がある。「同一 柏木藤のふさなかきを夕きりのさかつきにくはへ給ふ也。むらさきにかことはかけんの哥の所也」という付箋の記述が、場面を明確に特定している。ここでは、四人の男性貴族が、それぞれ料理を載せた折敷を前にして座し、部屋の中央には何も載せられていない折敷がひとつある。画面左下の男性貴族は、提子（ひさげ）長い柄のついた酒を注ぐ器を持つ。給仕の役であろう。ここでも、屏風を背にして座しているのが内大臣だが、その隣りの杯を手をしているのが夕霧で、夕霧は、藤の花の枝を持つ柏木の方を向いている。そうすると、座の位置は、内大臣から見て、夕霧・柏木の順ということになり、「根津美術館画帖」と比べると、夕霧と柏木の位置が逆になっている。



【場面】 A…(2)父大臣は修験者と語る。

【該当本文】

「3」父大臣は修験者を招いての加持、柏木は抜け出て小侍従と自分の罪、女三の宮のことを語る

大臣、かしこき行ひ人、葛城山より請じいでたる、待ち受けたまひて、加持まゐらせむとしたまふ。御修法、読経なども、いとおどろおどろしう騒ぎたり。人の申すままに、さまざま聖だつ験者など、をさをさ世にも聞こえず深き山に籠りたるなども、弟の君達をつかはしつ、尋ね召すに、けにくく心づきなき山伏どもなどいと多く参る。わづらひたまふさまの、そこはかとなくものを心細く思ひて、音をのみるときどき泣きたまふ。陰陽師なども、多くは女の霊とのみ占ひ申しければ、さることもおぼせど、さらにもものけのあらはれいで来るもなきに思ほしわづらひて、かかるくまぐまをも尋ねたまふなりけり。

「大成」 4巻1229頁、「大系」 4巻14頁、「新大系」 4巻7頁、「全集」 4巻283頁、「新全集」 4巻292頁、「集成」 5巻270頁、「角川文庫」 7巻22頁、「玉上評釈」 8巻28頁

【解説】

隣り合う二室が、吹抜屋台の手法で描かれる。画面中央上部には、病の床に就いた柏木と、側に仕える女房、小侍従が描かれる。小侍従は、柏木と女三の宮との仲介役である。左側の別室では、画面向かって左側に座すのが柏木の父大臣だとすると、右側にいるのは、柏木の病平癒の加持のため、大臣に招かれた修験者か。ただし、この人物が、修験者姿ではないことには注意される。

庭の白い花が咲く木は、枝振りから見て梅か。当巻冒頭には、「衛門

の督の君（柏木）、かくのみ悩みわたりたまふことなほ怠らで、年も返りぬ。」とある。

【考察】

「文情貝合」と同じ構図は、「石山寺画帖」柏木一（二五一図）に見える。「かしわき一 かつらき山よりしやうし給ふきやうしやとおと、とかしはのわつらひのやうす物かたりのてい也」と付箋に記されるとおり、「石山寺画帖」においては、柏木の父大臣が修験者を招いた場面（画面左側）を主とするものと見られよう。なお、この場面を単独で描いたものとしては、「京博本」（「長次郎」銘。『源氏絵の世界』には未収録）がある。

さて、中央上部に見られる、柏木の傍らに小侍従を描くという構図は、柏木が小侍従に紙燭を持たせ、上半身を起こして女三の宮からの文を読む場面として、「源氏物語柏木冊子表紙絵」（江戸時代初期、スペイン・コレククション蔵）¹³⁸（『源氏絵の世界』180頁）や「承応版」柏木第一図に見られる。だが、「文情貝合」や「石山寺画帖」では紙燭や文は描かれず、また、柏木は横たわったままである。あるいは、転写の過程の写し崩れにより、紙燭や文が描かれなくなったものか。ともあれ、等巻における病む柏木と彼に仕える小侍従という構図を端的に描いている。

第四十二帖 匂宮



【場面】 B…夕霧の催す賭弓の還饗に、匂宮・薫ら車を連ね、六条院へ。雪降る。

【該当本文】

「11」夕霧は賭弓の還饗を六条院で催し、親王たちや匂宮を誘う、薫の芳香のめでたさ

例の、左あながちに勝ちぬ。例よりはとくことはてて、大将（夕霧）まかでたまふ。兵部卿の宮、常陸の宮、后腹の五の宮と、ひとつ車にまねき乗せたてまつりて、まかでたまふ。宰相の中将は負けがたにて、音なくまかでたまひにけるを、「親王たちおはします御送りには参りたまふまじや」と、おしとどめさせて、御子の右衛門の督、権中納言、右大弁など、さらぬ上達部あまたこれかれに乗りまじり、いざなひたてて、六条の院へおはす。道のややほどふるに、雪いささか散りて、艶なるたそかれ時なり。ものの音をかしきほどに吹きたて遊びて入りたまふを、げにここをおきて、いかならむ仏の国には、かやうのをりふしの心やり所を求めむ、と見えたり。

【大成】 5巻144頁、「大系」 4巻230頁、「新大系」 4巻223頁、「全集」 5巻27頁、「新全集」 5巻33頁、「集成」 6巻176頁、「角川文庫」 8巻36頁、「玉上評釈」 9巻239頁

【解説】

宮中の賭弓の後、夕霧は、還饗をすべく、牛車を連ねて六条院へ向かう。一行には、匂宮はもちろん、親王たちや上達部、負け方の薫までも伴うという、晴れやかな場面である。「文情貝合」には、画面手前に二台の牛車と車副（くるまぞい…牛車の左右につき供奉する従者）が描かれる。画面左から二人目の背を向けている人物は、髪を後ろで束ねた童

子の姿である。牛飼童と見られる。また、松や塀の屋根に降り積もった雪をもきちんと描いている。

【考察】

「文情貝合」と同様の構図は、「石山寺画帖」匂宮一（二八九図）に見える。付箋には「にほふ宮一 夕霧の御こたち何もともなひ六条院へ参り給ふてい也」と記される。また、『住吉具慶筆源氏物語絵巻』（江戸時代初期・茶道文化研究所旧蔵。現在はミホ・ミュージアム蔵）161（『源氏絵の世界』204・205頁）にもこの場面は描かれており、「この帖の代表的場面」（『同』205頁）とされる。いずれも、行列の先頭には、牛の傍らに童子の姿で一人の牛飼童を描く。「文情貝合」にも見られるところである。

第四十九帖 宿木



【場面】 B…帝、薫に碁の賭物として菊を折らせ、女二の宮降嫁の意を
灰めかす。

【該当本文】

「4」帝は薫と碁、その賭物として女二の宮との結婚をほめかすが、
あまり気のすすまない思い

さて打たせたまふに、三番に数一つ負けさせたまひぬ。「ねたきわざ
かな」とて、「まづ今日は、この花ひと枝許す」とのたまはすれば、御
いらへ聞こえさせで、おりておもしろき枝を折りて参りたまへり。

世のつねの垣根に匂ふ花ならば心のままに折りて見ましを
と奏したまへる、用意浅からず見ゆ。

霜にあへず枯れにし園の菊なれどのこりの色はあせずもあるかな
とのたまはず。

- 「大成」 6巻1704頁、「大系」 5巻37頁、「新大系」 5巻32頁、「全集」 5
巻368頁、「新全集」 5巻378頁、「集成」 7巻156頁、「角川文庫」 9巻42頁、
「玉上評釈」 11巻100頁

【解説】

画面左上の邸の中、縹綯縁の上に座し、顔を隠した構図で描かれるの
は帝である。画面向かって右側には、白と朱で菊の花が描かれる。「該
当本文」の前に「御前の菊移ろひはてで盛りなるころ」とあることから、
その時節を菊の色で表したものが。その傍らには、庭に下り、手折った
白菊を袖に溜める薫の姿がある。

【考察】

「文情貝合」と同じの構図の図柄は、『土佐光吉筆源氏物語色紙絵』（桃
山時代、和泉市久保惣記念美術館蔵、略称「久保惣色紙絵」）182（『源氏

絵の世界』224頁)、「石山寺画帖」宿木一(三三三図)に見られる。「久保惣色紙絵」は、薫がまさに菊を手折ろうとしているところ、「石山寺画帖」は、薫が菊を手折っているところである。「石山寺画帖」の付箋には、「やとり木 天子とかほる五をうち給ひかほるかちて御にわのきくをおり参り給ふ所也」とある。「久保惣色紙絵」の菊の色は白一色であるが、「文情貝合」は、前述のとおり白い菊と朱の菊を交えて描く。色が変わり果てる前の盛りの菊を描き、花の色が変わって行く過程をも愛でる平安当時の美意識を表現したのかもしれない。なお、「承応版」宿木巻第一図も同じ場面に着目しているが、庭で菊を手折った薫が、靴を脱いで階に片足を掛け、邸の中の帝の側に戻ろうとしている姿を描いている。

【まとめ】

「文情貝合」八対のうち、源氏絵の系譜の中に、その類型が認められるものは七対あった。すなわち、桐壺巻・滯標巻・野分巻・藤裏葉巻・柏木巻・匂宮巻・宿木巻である。特に、源氏の元服や住吉詣で、玉鬘に戯れかかる源氏を垣間見る夕霧、修験者に加持を依頼する柏木の父大臣、六条院に向かう夕霧一行の行列、庭に下りた薫が菊を手にする姿からは、巻や場面の特定は容易である。『源氏物語』を題材に、各巻を絵画化した遊具であつてみれば、それらの絵から巻や場面を特定できるということは、ごく当たり前な必須の要素であろう。その点で、類型が未だ見出せず、巻の判断を若干躊躇する明石巻の図柄についても、今後の調査によって、類例が見出される可能性があるだろう。

貝の内側という、曲面の狭い範囲に描かれた絵にしては、物語を細やかに描き出している箇所がある。桐壺巻の冠や笄、滯標巻の明石の君の

舟は必須としても、源氏一行の先頭を行く童隨身、匂宮巻の松や塀の屋根に積もる雪、宿木巻の菊の色などは、物語の特定の場面に即した繊細な描写になっている。また、匂宮巻の牛飼童は、物語にこそ表立って出ては来ないが、牛車の行列には不可欠な存在として認識され、描かれたものだろう。その一方で、藤裏葉の藤花の宴や、柏木巻の病む柏木と側に侍る小侍従といった構図には、藤の花房や紙燭・文が描かれておらず、物語の一場面の詳細な描写というよりはむしろ、それぞれの巻の物語の場面を象徴的に示すものとなっている。また、明石巻の明石入道と、柏木巻の修験者の衣装が、それぞれ出家者や行者の姿ではない点については、何らかの意図に拠るものだとすれば、本品が製作された目的とも関わる可能性がありそうではあるが、今はこれ以上の憶測は控えよう。

本稿をきっかけに、かつて「文情貝合」と一揃いであつたであろう、他の貝合せの具が見出されることを、鶴首して待つ。

附記

本稿は、「知識発見型データベース作成アプリの開発と日本伝統文化の分野横断的研究」(同志社大学人文科学研究所第20期研究会第3研究(二〇一九〜二〇二二年度))、「近世から近代に至る日本伝統文化の分野横断的研究とデータサイエンス教材への活用」(科学研究費助成事業基盤研究(C)課題番号20K12565、二〇二〇〜二〇二二年度)、および同志社大学宮廷文化研究センター(二〇二二〜二〇二五年度)における研究成果の一部である。